生本能 vs. 死本能 ——ロレンスとフロイト——

安　藤　　泉
外　国　語　教　室
(1979年9月6日受理)

Eros vs. Thanatos ——Lawrence and Freud——

Izumi Ando
Department of Foreign Languages
(Received September 6, 1979)

In spite of his pungent critiques on psychoanalysis, D.H. Lawrence's writings are to a very large extent influenced by Siegmund Freud. This is specially apparent from his views on life based on human unconsciousness. Therefore, taking his novel *The Lort Girl* and his two essays *Psychoanalysis and the Unconscious* and *Fantasia of the Unconscious*, I will delve into this relationship. The twin conceptions, Eros and Thanatos, are seemingly presented as a common proposition, undermining life and civilization *per se*.

D.H. ロレンスがフロイトについて言及したものはさして多くはない。そして1921年に上梓された『精神分析と無意識』，次いで1922年の『無意識の幻想』において共に，ロレンスはフロイトの性に対する積極性を讃えながらも，概して批判的であったし，というよりはむしろ，この二書でロレンス独自の無意識に関する直観的理論を展開したというほうが正確かもしれない。しかしながらともかく，ロレンスの著述に，とりわけ個人の活動と個人をとりまく文化ー社会の様態に関して，フロイトと共通した問題意識の所在を見出すことは決して稀ではない。それをこの時代（1890年～1922年頃）のイギリスの小説家たち（ハーディー，バトラー，ハドソン，フォースター，ロレンスら）の "Nature" と "Society" への関心と結びついた創作活動における時代的潮流として見るJ. アルコーン[1]のような把え方もあるが，その是非はしばらく置くとしよう。この小論で筆者の意図するところは，ここに言う「共通した問題意識の所在」が果して本当に共通したものであるのか，そしてロレンスの小説観にこの問題がいかに介在するか，を，実際の作品と照し合わせて考えてみることである。『迷える女』(*The Lost Girl*) は，この課題に沿って考察するのにふさわしい作品であると思われるので，この作品を中心に論を進めたいと思う。

1.『迷える女』成立の過程とそのテーマ

ロレンスがフロイトについて知ったのは，妻のフリーダを通じてであり，その時期は彼女に出会う1912年の頃とされているから決して早いとは言えない。この年彼は，『息子たちと恋人たち』の最終稿にかかり切っており，フロイトの影響が『息子たちと恋人たち』に「かろうじて間に合った」[2]とも考えられる。そして，A.B. クットナーの『フロイト的解釈』(1916) 以来，批評家たちは『息子たちと恋人たち』のエディプス・コンプレックス的要素を幾たびとなく指摘することによって，ロレンスとフロイトのつながりを説いてきた。しかしもちろんロレンスが『息子たちと恋人たち』を着想し，主人公ポール・モレルの遍歴を心に描いたのは，フロイトとは無関係の時点である。1913年の初めにはロレンスは新しい小説に着手した。1月17日の A.W. マクラウドに宛てた手紙に「新作を80枚ほど書き上げた」とある。[3] これが当初『ホートン嬢の反逆』(*The Insurrection of Miss Houghton*) と題して書き始められた『迷える女』の初稿であったことは疑いない。そして4月5日，今度はD. ガーネット宛ての手紙に，「小説を200枚まで書いた。そして——金儲けの仕事をするために——中止した」とあ

る。[4] つまり『迷える女』は，200枚まで書かれた時点で中断されたのである。ただ，ロレンスがこの小説に込めていた思い入れが相当なものであることは，上記のこれらの手紙からもよくわかる。

「とても好奇心をそそる小説。書くのはこの上ない喜びですがただ，読者は読むのが苦痛となるかもしれない。」(マクラウド宛て)

「それはわたしが今書けるもの，喜んで書けるものであり，だからわたしは書かねばなりません。」(エドワード・ガーネット宛て)

「わたしの愛する小説。」(デヴィド・ガーネット宛て)

こういう形容のしかたで把えていた作品をなぜ中断したかの理由には，これから考察しようとする問題と深い関係があると思われるので，追って考えることにしたい。とにかく，1913年4月の段階で一旦中断された『ホートン嬢の反逆』は，翌年『混り合った結婚』(*Mixed Marriage*) の題名で再度着稿された。しかしこれも完成には至らず，ロレンスが『迷える女』を最終的に現行の題名で再再度着手完成するのは，第一次大戦を間にはさんで1920年のことである。

この間，つまり着想を得た段階から最終稿完成までおよそ7年余の間は，ロレンスにとって現実面でも決して暮しやすい時期ではなかった。『ホートン嬢の反逆』を中断して始めた「金儲けの仕事」はすぐに「真面目な苦しい作品[5]」に発展し，いわゆる『虹』と『恋する女たち』というロレンスの最高傑作に成長するのであるが，前者は出版2ケ月で発禁処分，後者も発禁を懸念して1920年のニューヨークでの予約者限定出版まで伏せられることとなる。政治と平和に関する基本的な理念の相違から，バートランド・ラッセルと絶交。戦争に対する態度と妻フリーダのドイツ人である故の官憲による圧迫。ドイツのスパイ容疑のかどでの居住地追放。徴兵検査。等々。この期間ヨーロッパ全体を覆った悪夢の如き戦争はほぼ平行してロレンスの活動にも深い影を落し，ロレンスはついに，フィクションよりも批評等の散文に力を入れるようにまでなる。

しかし，戦争が終りを告げると同時にロレンスは再び小説にとりかかる。『アロンの杖』，そして『迷える女』が完成される。『虹』や『恋する女たち』の体験から『迷える女』の出版に対してロレンスは慎重の上にも慎重を期して，出版社のセッカーの注文に従い，「もちろん手直しする前の方がよいのだが」と友人に語りつつもとにかく "passable" なものとし，自信を持って上梓するに到った。しかし，反応は皮肉にもあまり芳しくなく，E・ガーネットのような熱心なロレンス信奉者を除き，ヴァージニア・ウルフを初め，キャサリン・マンスフィールド，ジョン・M・マリ等，概して同世代の作家たちの不評を買った。その批判の中心を占めているのは，『息子たちと恋人たち』から『虹』に至って達成された「ロレンスのオリジナリティ」の欠除（ウルフ）と，新しい時代の小説としてはすでに乗り込えられたはずの「日常的事実 (facts) の山」(ウルフ)[6] への批判であった。

しかし，この批判は当っているであろうか。確かに，小説の道具立てをとり上げるとき，作品前半の殆んどはノッティンガムシャーにある小さな町ウッドハウス（ロレンスの生地イーストウッドがそのモデルである）でのホートン父娘の生活の描写で占められ，せまい田舎町で，没落しかけてなお昔の夢を捨てないドンキホーテ的素人商人の父親と，その社会のありかた一切に反抗する娘の事細かな「事実」描写の積み重ねで満杯とも言える。だが，このことはロレンスにとって，核心となる事象を呈示するための，言わば布石のようなものであったと考えられる。つまり，ロレンスは，最も平凡，最も日常的，最も俗世間的，現実的な生活と意識の底に一貫して胚胎しており，奔出の機会を窺っている人間固有の願望を自ずと流出させるためのパラドクシカルな布石として，「事実の堆積」を呈示したのではなかったのか。この願望とは，端的に言って，社会的拘束のために抑えつけられている人間本来のエネルギーである。このエネルギーは，社会という提防を打ち破り，些細な機会を把えて溢れ出るすきを窺っている。すなわち生れついて以来のわれわれ各々のなかの太古的精神の諸表現，原始的感情の諸傾向は，普段は社会生活のうちに押し込められているのだが，それは決して消滅することなく，思いがけない切っ掛けを利用して外に表れてくる。小説の中で，アルバイナ・ホートンの行動はまさにこの真の深い願望に従って生じたものである。マンチュスター・ハウスと呼ばれる父親好みの広大で装飾豊かな屋敷の中での，実際は日々の出費も切りつめた暮し。世間の常識に沿って，いささか婚期の遅れた娘が手に職を付けるべく通う助産婦学校に，アルバイナも自ら出かけて行く。オックスフォード大学生との常識的デート。そして父親のたび重なる事業の失敗とマンチュスター・ハウスの没落。そういった運命の中で，彼女はついに，旅芸人一座のインディアン役であるイタリア人チチオに深く心を奪われ，彼について旅興行の一員に加わり，戦争のために一座が離散した後も，チチオに付いてイタリアの山奥に住み着くことになる。このチチオが彼女を魅了する切っ掛けとなるのは，彼が，ナッチャ・キー・タワラ座の宣伝のために派手な姿で町を行列する一座の連中のうちでも抜きん出て大胆自由に馬を疾駆させる一瞬である。絵の具を体一面

塗りたくり羽根飾りをつけた半裸の男たちの姿は，「残酷で野蛮で，文明のはるか下を行く」「信用してはならない」「恐しいもの」[7] とアルバイナの目に映る。が，逆にその中に，かつて出会ったことのない極度に善良な太古的気質を垣間見ることもできる。観客たちは，その「文明のはるか下を行く」力によって何とはない不安に押しやられ，「アナクロニズムだ！」と叫ぶことで自分らの普段の足場と安心感に立ち戻ろうとする。アルバイナもそう信じようと努める。

> チチオは風に吹かれてやってきた幻，きっとまた吹かれて行ってしまう。現実的で永遠なのは，このウッドハウスの町。ナバラ通りと，永久に変わることのない陰気なマンチュスター・ハウス。(中略) これが堅固な永劫の事実。これが生活そのもの。そして栗毛の馬に跨り，縁色の衣装をまとって飛びはねるチチオは，山師で，よそから闖入した非存在，作り事でしかない。ナバラ通りを地獄（リンボー）へと吹き抜ける派手な古布なのだわ。地獄へと。それに比べて，店を切り回しているピネガーさんも父親も，かびがはえたように永遠に座り続け，トーストを食べ，固い耳の部分は切り落し，お茶を三杯もお代りして飲み続けるのだ。決して吹かれて行ってしまうことはない。ウッドハウスは永久にそこにあるのだ。[8]

そしてこの「永劫の事実」を，つまり古い社会制度と風習に沈滞するウッドハウスの人々の暮しを構成する「事実」を網羅することが，逆にそれを突き破り，奔出の機会を窺っている，より本然的な人間の願望を浮き彫りにするためのパラドクシカルな布石であることは，明白である。アルバイナは，老嬢ピネガーや町の人々が，慣習と実利主義的教養の名のもとに切り捨て，蓋をしてしまおうとする，この勇敢なる無，非存在，にどうしようもなく気持を揺さぶられるのである。

我々はここで，ロレンスが『ホートン嬢の反逆』を着想した遠因とされているアーノルド・ベネットの『五都地方のアンナ』に対する彼の批判を思い出す。

> ぼくはイギリスとその無希望を憎む。ベネットの忍従を憎む。悲劇とは，実際，悲惨に対する力強い足蹴であるべきだ。それなのに，『五都地方のアンナ』は悲劇の承認のように思われる。フローベル以来のあらゆる近代文学はそのとおりだ。それをぼくは憎む。ぼくは急いで洗いたい――イギリスの古さと汚穢と絶望とを洗い去りたい。[9]

それに対して，ロレンスが『迷える女』で描こうとしたものは，古さと汚穢と絶望に埋れたイギリスの真底に潜む欲望である。

> ぼくは自分の内部に，今日の欲望に対する一種の答えを持っていると思う。その欲望とは，単にイギリス人が望んでいると空想しているものでなく，彼らの真の深い欲望なのです。そして徐々にぼくは彼らのこころをとりこにするでしょう。この小説はたぶんあまり優れた芸術作品ではないが，とにかくそれはイギリス人が欲し，必要とするものなのだ。[10]

ヴァージニア・ウルフは，その『現代小説論』の中で，ベネットを物質主義として批判していた。ロレンスは，実は自分が批判の対象としたベネットに対するのと同じやり方で（「事実の山」のレッテルで）ウルフが自分を批判し，この『迷える女』を天才の駄作としたことは心外であったに違いない。ウルフが『迷える女』の真のテーマを見抜くことなく，表現方法の批判に終始したことは，ロレンスの筆不足の故か，[11] ウルフの抱く小説に対する着眼点の相違の故か，そのどちらからとも考えられるが，とにかく，ロレンスの関心は，イギリス人の深い願望を描くことにあった。そして，この「人間の持つ真に深い欲望」が，フロイト流に言う，現実原則によって抑圧されてきた，本来快楽原則に基くはずの諸々の欲動であり，太古的精神・原始的感情に極く近いものであることは容易に窺い知れよう。

それでは何故にロレンスは『迷える女』を上梓するまでに，これほど長い時間を必要としたのか。先に，いささか冗長すぎるほど詳しく辿ってみたこの時期のロレンスの活動経過からは，もちろん，『迷える女』が充分小説としての体裁をとらないうちに，作者が別の，より反社会的でセンセーショナルな作品に没頭し始め，官側との軋轢が高じて行く様が見られる。が，しかし，この7年という時間が，まさにロレンスの当初の執筆の意図である「イギリス人の真の深い欲望」を確信させたとも考えられるのではないだろうか。大戦の初めの頃，ロレンスは，ドイツ軍の進撃を思春期の情熱的行動に喩え，当時のイギリス政府のみならず，今日の知識人の良識をも逆撫でするような，そして往々にしてファシストに組するそしりを受けるもととなる言動を取ったりした。気の合う人間同士でこの世のどこかにひとつの新社会を実現しようという“ラナーニム”設立の夢は，生涯ロレンスにつきまとった。もっともこれは，結局は大戦激化のために失敗に終わっているのだが。しかし，ロレンスは，この戦争で人々の感情が，「普通の“立派”な通俗小説

の底を蹴破る」ほどに強く深く変わってきていることを感知し，歓迎している。[12]『迷える女』11章では，「1914年という運命的な年」が，それを象徴的に暗示する。この年，既成の価値観とモラルに則って自己のステータスにしがみつく医師ミッチェルは，アルバイナに求婚するため，まさに宣戦布告の当日，目下の戦争は6週間ばかりで終わるものと信じて彼女をお茶に招待する。そして，イタリア人チチオの非日常性を現実的な社会通念で追い払おうとしていたアルバイナは，ミッチェルの求婚を通して，体制的生活に埋没することで得られるはずのイージーな安穏さに，改めて，言いようのない苛立ちといやらしさを感じるのである。彼女はミッチェルの哀訴に近い求婚を拒絶する。執筆中断から大戦を経て7年後に小説が完成された時，1914年という年は，物語の上でも，社会通念の堤防の内側に居残るものと，その堤防を越えて個人の本然に従おうとするものとを選り分ける「運命的な年」となっていたが，1914年から数年に渡った大戦が，そういう人間の本然的ありかた，生きかたを希求することへの確信をロレンスの中でなおさら堅固にしたことも充分推測されるところである。

2. ロレンスと無意識

人間の本然的ありかた，生きかた，とは何か。ロレンスは，社会において教育の果している役割が，もっぱら子供に既存の通念でしかない“理想”を押しつけることになっていると考えていた。その目的は，完全な個人を作ることと，完全な市民を作ることである。そして，戦争中は，完全な個人となるための自我 (Self) が不明確に放置されたまま，「国民奉仕の理想」(the Ideal of National Service) の錦の御旗の下に，完全な市民を作ることにまず比重がおかれ，全力が注がれる。[13] 実際，「教育は，各個人のうちに，強要的かつ無意識的な超自我を形成することで事足れりとしている」と考えたフロイトと，この点でロレンスは意見を同じくしている。ロレンスは，大戦が結局のところ，故国に無希望と不安と嫌悪の感情を固定させただけに終り，故国が「古さと汚穢と絶望」から抜け切れなかったことを，噴りつつも認めざるを得なかった。彼はそんなイギリスに滞ることができず，イタリアに渡る。その国もやはり戦争の影響で，かつての陽気な無頓着さを維持することが難しくなっていることを嘆きつつ，それでもそこで彼はイギリスに居るよりはましな生きかたができると感じていた。この時期にしたためられた『精神分析と無意識』，『無意識の幻想』の二書で，ロレンスは人間の本然的ありかたに関わる現代人のためのバイブルを残そうとしたと思われる。

> 我々は古い幻のヴェールを引き裂き，心が真に信じているものは結局何であるか，心が明日の日に偽りなしに求めているものは何であるか，を見出さねばならぬ。そして我々はそれを信念と知識の言葉で記さねばならぬ。そして再び行進をはじめ，生と芸術との達成にまで到るのだ。(『無意識の幻想』序文)[14]

ロレンスは，人間活動の第一の動機が本質的に宗教的であり，同時に創造的なものであるとした。彼によれば，人間の最大最深の意識中枢として，「太陽叢 (ソーラープラクシス)」なる神経中枢が，胃の背後に存在するのであり，「我は我なり」という根元意識を司る。知性以前のものであり，認識とは何ら関わりのないこの根元意識は，またそれ故に動物のそれと変わらず，ダイナミックで，万物のヴァイタルな中枢である。そして万物の中枢たるこの太陽叢は，もう一つの核である「腰椎神経節 (ランバーガングリオン)」と結んで，(前者が我は我なりという帰一的アィデンティティを生むに対して，後者は，言葉は同じでも，我は非我なる一切の宇宙から区別された我なりという分離的アイデンティティを識別するという意味で) 合一・交感衝動と独立・離反衝動から成る二元的な人間活動力学の根源を形成する。そして人は，この人の人たる所以の場所，最深の自覚の場所に座することで，合一・離反の力学的交流回路を外界である全宇宙との間に形成して行く。父と子の，母と子の，兄弟姉妹の，男と女の，生の回路が成立して行く。人の創生にあずかり，単に個と個の融合の結果に留らぬ何かそれ以上のもの，偉大なる創造の神秘が行なわれ，各人はひとつの完全に新しい全体，ひとつの自己として活動し始める。ロレンスが人間活動の第一の動機を宗教的であると同時に創造的であるとしたのは，この太陽叢から発した人間のダイナミックな自己意識が，「己れの頭脳から，己れ自身から，己れの魂の信仰と歓喜とから，何か驚嘆すべきものを生み出そうとする」「純粋に非打算的な渇望」，「大なる衝動」，を包有すると考えたためである。

端的に言って，ロレンスは，人間本来のありかたをこの太陽叢から発した大なる衝動に基く知識以前の動物的レベルに置いた。「認識すること」を排除する，それ故に無意識の段階で生み出されるこの大なる衝動は，まさしくロレンスにとって生活動の根源であり起源であった。そこから無意識が生み出す幻想曲，現実の枠を越え出た夢幻劇が展開されるはずである。もちろんこの幻想曲が，幽遠なる霊の調べ (メロディー) では決してなく，肉の実在から，つまり，胃の背後の神経叢 (太陽叢) から発した「物質の

生理学」的とも言うべき血の脈動のリズムであることは言うまでもない。

ロレンスはフロイトが「無意識」についてあまりに科学主義的，診療室主義的であることに不満を持った。医師であるフロイトにとって患者の治療が万事であることは当然ではあるが，ロレンスに言わせれば，精神分析の持つ高度の記述性を認めるものの，それは生きることへの精神的ガイドとしては充分機能しえないとの言である。

フロイトが「無意識」について語るのは「抑圧」の過程との関連においてである。欲動を表す表象を意識しないでいるとき，その表象は「無意識」の状態にある，とわれわれは言う。「すべて抑圧されたものは無意識のまま」である。[15] そしてフロイトの「無意識」体系の特性は次のようになる。

> 「無意識」の核は，その充当を放出しようとするところの欲動の代表，つまり願望興奮からなりたっている。
>
> これらの欲動興奮は，たがいに並列し，たがいに影響されないで並びつづけ，矛盾しあうことがない。（中略）
>
> （欲動の）充当の強さは，ひろい範囲で可動的である（中略）
>
> 「無意識」体系の事象には時間がない。（中略）
>
> 「無意識」の事象は，おなじく現実について顧慮するところが少ない。それは快感原則にしたがっている。[16]

さて，かかるフロイトの「無意識」論は，ロレンスのいう人間の本然的ありかたの核としての無意識と決して矛盾するものではない。というよりもっと積極的に，ロレンスは精神分析の持つ明晰な記述性に対して生涯多大の関心を払わずにいられないでいる。太陽叢から発する大なる衝動は，まさしくフロイトの言うところの「欲動」であり，快感原則にしたがった「無意識の事象」である。しかし，ロレンスは敢えてそれを放棄しようとする。

> 精神分析上の無意識とは，事実意味するところ皆無であり，不愉快きわまる見せもの動物にすぎぬ。[17]

そのわけは先述の如く，ロレンスが精神分析をあまりに科学主義的，心因性病気治療第一主義的だと見なしていたことによる。確かにフロイトは，「無意識」を抑圧と充当の過程でとらえ，「意識」及び「前意識」とそれとの間に「検閲」を介在させることで無意識の特性を呈示しようとしたのであって，決してそれ以上の価値観を無意識に付与したのでもないし，願望興奮の制限の非を唱えたのでもない。（ただし彼自身はこの「無意識」に関する叙述で，精神分析が記述的な意識心理学から一歩ふみ出し，深層心理学と名づけられるべき努力を払ったこと，及び，心理的現象の叙述にあたって力学的局所論的観点にとどまらぬメタサイコロジー的な叙述に到達したことを強調しているのではあるが。[18]）

ロレンスが「イギリス人の真の深い欲望」を嗅ぎとり，人間本来のありかたを考えるのに，フロイトの「無意識」論に影響を受けなかったとは決して言えない。しかし「根源」としての無意識から新たに旅立つためには，彼は精神分析を敢えて糾弾せざるを得なかった。

> 《血の意識》《血の情熱》（人間の真の深い欲望，抑圧されない欲動の情熱のことである。従って無意識のうちに我々の内に存在しており，ロレンスはこれを「昼間の自我」に対する「夜の自我」とも呼んでいる。――筆者注）こそ我々の根源であり源泉である。（だが）この根源にとどまれというのではない。フロイトのようにこの根源を目的地にしてはならない。生の営みはこの根源から旅立つことにあるのだ。[19]

要するに，ロレンスは人間の生の営みの源泉として無意識の奔流を認識した。言わば，彼の存在論的哲学の母体をそこに置いたと考えられよう。それは当然のことながら，生活動の諸々の局面の見方においてロレンスとフロイトの相違を生む。一例としてかつ最大の例としてセックスについて（なぜなら二人ともセックスを無意識の欲動と最も深いつながりがあるとしていたから）。フロイトは無意識の（抑圧されていない）欲動の有りようとしてのセックスを語ったが，ロレンスはセックスが無意識の生の奔流の唯我的本質とされることを警戒する。

> 一体セックスとは何か。（中略）セックスとは人間間のダイナミックな磁極性であり，常に流れてやまぬ力の回流であると，ここまでは精神分析は正しいのだ。二人の成人の間の生々とした関係はすべて，これら二人の間の，活力，磁気あるいは電力，名前は何と呼んでもよいが，そういうもののダイナミックな陰陽極の流れにもとづくのは事実である。しかしこのダイナミックな流れは必ずセックスを本質とするものであるか？
>
> これは精神分析にとって未決の点である。[20]

本当だろうか。偉大にして未知なる眠りは本当に他に何も含有していないのか。人間の元となる領域

に何ら美しい霊魂は存在しないのか。本当に何もないのか。[21] (傍点筆者)

ロレンスがここで言おうとしているのは，人類の生活動における宇宙（世界）創造のための熱情的団結のことである。そこではひとつの新しい合同（集団的活動）を求める渇望が，人間の無意識にして（太陽叢から）奔出する生の渇望と同一視されている。そしてこの合同は，男と女の間のダイナミックな陰陽極の流れが前提とされるが決してそれだけに留まるものではない。フロイトが性的動機をいっさいの人間活動に帰着させたことへのロレンスの批判はそこにあった。ただし，この無意識の，抑圧されていない，人間の欲望とセックスとの深い結びつきを主張するフロイトの積極性が，まさにロレンスをフロイト以外の人たちとはっきり分離する点であることは言を待たないのであるが。

ユングの「リビドー」やベルグソンの「生の躍動（エラン ヴィタール）」よりはフロイトの「セックス」の方がわれわれにとってはましである。少くとも「セックス」はある確定の指示内容を有している。[22]

3. 生本能と死本能

フロイトが無意識を「抑圧」においてとらえ，人間のいっさいの欲動力を「快楽原則」に還元したこと，そして快楽欲それ自体は決して称賛すべきものとして肯定的にとらえてはいなかったことに対して，ロレンスは意識の奥の（無意識の）神秘の力を人間の生活動の根源ととらえることでその存在論の中核を築き上げた。

さて，しかしながら，ロレンスがこの無意識の幻想曲を一面的に，ひたすら生の賛歌にあてようとしていたと考えることは大変危険である。彼は人間に生（充実した生）と死（完膚なき破壊）の両極的局面があると同様，もろもろの生活動の産物である文化や社会現象自体にその二局性を見究めていた。

『迷える女』着稿後，それに取って代ってしばらくロレンスが精魂を傾けることになった作品『恋する女たち』から引用してみよう。生の二つの流れについてバーキンがアーシュラと交わす会話である。

「…なるほどぼくたちは銀色をした生命の河のことはいつも考えている。それが明りの方へ，天の方向へ，流れ続けながら，世界に生気を与え，輝かしい永遠の海へ，天使の群がる天へ流れ込んで行くってことをね。だけど，もうひとつ別の河が実はぼくたちの実存なのだ。」

「それは何？　わたしにはわからない。」とアーシュラは言った。

「それが君の実存なんだ。その暗い溶解の河がね。だれの中にも流れているんだよ。崩壊の黒河だ。ぼくたちの花はみなこれから生れるんだ。海の泡から生れたアフロディテ，官能的完成とも言うべき燐光を放つぼくらの白い花，ぼくらの実存，今日あるすべてがだ。」

「アフロディテが死の象徴ですって？」

「そう，それは死の過程を示す開花の神秘なんだ。総合的な創造の流れの力がゆるんだとき，ぼくらは自分が逆の過程，破壊的な創造の血の一部であることにきづくのさ。アフロディテは，こういう宇宙の崩壊の最初のけいれんの中で生まれるのさ。(略)」

「あなたもわたしも？」

「多分。ある意味では絶対確かだね。(略)」

「わたしたちが崩壊の花――悪の華というわけね」(中略)

「だけど人々がみな崩壊の花だとしてもそれがどうしたの？　とにかく花ならそれでいいじゃないの？　どう違うの？」(アーシュラの言葉――筆者注)

「違わないさ。――そして徹底的な違いがあるのさ。崩壊は創造と同じように進行する。それも漸進的過程なのさ。ただそれは宇宙の無，言わば世界の終局に行きつくことになる。ただし世界の終りが世界の初めより悪いってことにはならないけどね。」[23]

作中バーキンは殆んどロレンスの代弁者であるとみなされるのだが，バーキンがここで語る人間の実存における創造と崩壊の二つの河の流れが，精神分析におけるいわゆる「生の本能」と「死の本能」の対立にたとえられるものであることは容易に察知せられよう。生命を与えられたものが無生の状態を回復しようと求める「自我本能」(＝死の本能）と有機的なものをより大きな統合にまとめあげる「性的本能」(＝生の本能）の二元対立をフロイトが『快感原則の彼岸』の中で表明したのは1920年である。この年奇しくもロレンスは，4年前から出版の機会を待っていたこの『恋する女たち』をニューヨークで上梓したのである。

生本能（エロス）vs. 死本能（タナトス）の対立は後年のフロイトの文化論の中心となる。

文化は，最初は個々の人間を，のちには家族を，さらには部族，民族，国家などを，一つの大きな単位――すなわち人類――へ統合しようとするエロスの

ためのプロセスである。（中略）ところが，人間に生れつき備わっている攻撃欲動——万人がたがいに抱いている敵意——がこの文化のプログラムに反対する。この攻撃欲動は，われわれがエロスと並ぶ二大宇宙原理の一つと認めたあの死の欲動から生れたもので，かつその主要代表者である。ところでここまでくれば，文化の発展の持つ意味はすでに明らかと言ってよいだろう。文化とは，人類を舞台にした，エロスと死のあいだの，生の欲動と死の欲動のあいだの戦いなのだ。この戦いこそが人生一般の本質的内容であるから，文化の発展とは，一言で要約すれば，人類の生の戦いなのだ。[24]

フロイトの言う生におけるエロスとタナトスとの二元対立は，言葉こそ同一でないにせよ，大戦中からそれ以後のロレンスの文化観，社会観においてもはっきり認められる。この問題を再度，『迷える女』の中で考察してみよう。

アルバイナは自己の蘇生の足掛かりを提供してくれたチチオの中にもすでに，彼生来の心的肉体的美の背後に，安易にそれを放棄してしまいそうになる卑俗な破壊性が潜んでいることを見出すのだが，とにかく彼とともに，職を得られぬ戦時下のイギリスを去り，チチオの故国イタリアへ渡って行く。イタリア＝南方は，ロレンスに限らず，多くのイギリス人あるいは北方系ヨーロッパ人にとって往々にしてひとつの象徴性を伴って見られる。ロレンスにとっても，北方の凍結性，白く冷たく氷結する北方文化に対して，南方（アジア・アフリカを含めて）は素朴で熱く激しい人間の欲動の奔出をより容易にする溶解性の象徴としてとらえられていた。その端的な例は，『恋する女たち』で，近代文明の落し子たる炭鉱主ジェラルド・クライチが雪に閉じ込められて山中で息絶えるのに対し，一方，木彫のアフリカ土人女の産みの苦しみにあえぐ顔に生の象徴が託されていたことにも見られよう。したがって，ロレンスは「汚穢」と「絶望」の際に立つイギリスに対置されるものとしてイタリア＝南方をアルバイナの行先にあてていると考えられるのだが，そのイタリアを見る目は決して一面的な肯定ではなく，ここでも併有される破壊性（タナトス）の所在がはっきり認識される。チチオについてイタリアに渡ったアルバイナは，ペスコカラスチオと呼ばれる山中の村からさらに徒歩で一時間かかる奥まった場所カリファノに住みついた。彼女が困惑するのは，チチオの叔父パンクラチオと共にする原始生活それ自体では決してない。それよりも，背景である自然そのものが無条件に人間の生を否定してかかるような「前世界」（“pre-world”）の存在が彼女の本能に激しい衝撃を与えるのである。アルバイナは自分がその中で生き続けられないのではないかと思い始める。

我々を拒む場所，我々人間の心的存在を粉々に打ち砕く力を持った場所がある。どの国にも我ら生あるものを無残に圧倒的に拒む強い否定的な核たる場所があるのだ。アルバイナはこのアブラッツィの端でそれに出会ったのだ。[25]

何とも言うに言われぬ美しさだった。残酷で冷たい谷間の雄大な異教的たそがれ，人間をいけにえにする権利を持った古代の神々の意識の感じられるこのたそがれをだれが語れよう。アルバイナは魂を奪われた。彼女はぼうっとし，生のもう一つの神秘を知った。[26]（傍点筆者）

自分は生きられないと思った。[27]

生命ある有機体に内在し，以前の（つまり無機の）状態を回復しようとする衝迫＝死の本能を，この場面ははっきり語っている。アルバイナは文化の殻を脱ぎ捨てて人間本来の生に立ち戻ろうとした瞬間初めて，生それ自体に内在する不気味な死（破壊）の欲動を悟って茫然とする（表題の示す“the lost girl”となる）のである。彼女は病める文化の膿としての戦争に疲弊する英国に対して，「まだまし」なイタリアで初めてこのような生の認識に到るのだが，そのイタリアもやがて参戦する。チチオの応召により，この時彼の子を宿していた彼女は二重の意味でひとりきりの生の戦いを始めることになる。イタリアは，アルバイナにとって，そしてロレンス自身にとって，文化の裏側にある生の本態を照し出す場所であると思われる。

ここでこの問題について，他の作品，作家と，ロレンスとを比較してみよう。例えば，イタリア山中の描写はロレンスとほぼ同世代の作家であるE・M・フォースターの『天使も踏むのを恐れる所』(1905) 等でも見られる。そこでは，祖国イギリスにはない明るい太陽と陽気なイタリア人気質，そして古代ヘレニズム文化への憧憬が重なって幻想の世界が生み出される。アルバイナと同様，この小説に登場するイギリス女性リリアも，イタリア人の若者ジノに魅せられてイタリアに住みつき，彼の子をもうける。しかし反面，『天使も踏むのを恐れる所』では，南方への熱き憧憬が現実生活での猥雑性，卑俗性に塗りつぶされていく過程で，良識ある英国人たち（例えば登場人物であるオックスフォード大学出の弁護士フィリップ，その他の上流イギリス人，及びフォースター自

身）が悲鳴をあげるのがはっきり聞きとれる。フォースターに限らずおそらく大部分のイギリス人が抱くと思われるこのようなイタリア像は，ロレンスにも皆無ではなかったろう。実際，彼は自分の体験から，他には何も言い分はないが，本が手に入れにくいこと，文字通り不潔，不衛生なことをイタリアで暮す上での唯二の欠点と手紙などに書いている。しかしながら，ロレンスのイタリアへの関心は，フォースターのような現象面での風俗，習慣にあるのではなかった。それはあくまでも，生本能と死本能の対立という生の極限状況を「物質の生理学」としてとらえるための，一つの場としての関心であった。

ロレンスのこの生本能と死本能に関する意識は，小説論としてその後の作品にどう継承されて行くのか。アルバイナは，チチオが言い残した「帰ったら二人でアメリカに行こう」という言葉を今後の展望のよすがとしようとする。彼女は自己の欲望の選びとった生の道を，文字通りエロスとタナトスの相剋に身を委ねながら，ぽつぽつひとり歩きし始める。アルバイナの行動は『翼ある蛇』のケイト，『チャタレー夫人の恋人』のコニーのひとり歩きに殆んどそのままひきつがれる。短篇『太陽』のジュリエットや『馬で去った女』のヒロインらによってその都度彼女らが選んだ生の意味が確認されていく。

ロレンスが「生のバイブル」の意図を持って書き上げた『精神分析と無意識』，『無意識の幻想』の二書は，その後彼が描く人物たちの行動を確実に方向づけているようだ。根底に死の本能を抱いた人物たちは，決して一方的な生の躍動——vital force 讃歌をうたうものではないが，地道に生とつきあおうとする。イギリス人の真の深い願望，無意識の領域を辿ることから始まり，精神分析への同意と反発を経つつ進んだこの歩みは，こうしておそらくロレンスの存在論的生哲学を形成していくのである。1930年，ロレンスが死を迎えた年，先に引用したフロイトの『文化への不満』が出版された。それはロレンスの死に対する最高のレクィエムであったとも言えよう。しかし，『恋する女たち』，『迷える女』以降，エロスとタナトスの争いのうちに生の道を辿り続けてきたロレンスにとってはいささか遅まきに過ぎた文化論でもあった。

参　照

1) J. Alcorn; *Nature Novel from Hardy to Lawrence*, (London, Macmillan, 1977) この中で著者は naturist なる造語を用いて，これらの小説家のフロイトに連なる活動を説明している。
2) Anne Smith ed.; *Lawrence and Women*, (London, Vision, 1978) Phillipa Tristram, "Eros and Death", p. 139
3) Harry T. Moore ed.; *The Collected Letters of D. H. Lawrence*, (London, Heinemann, 1962) p. 178, A.W. Mcleod あて
4) ibid., p. 197, D.Garnett あて
5) ibid., p. 197, D. Garnett あて
6) Virginia Woolf が Times Literary Supplement, 2 Dec. 1920 にのせた書評。R.P. Draper ed.; *D. H. Lawrence, the Critical Heritage*, (London, Routledge & Kegan Paul, 1970) pp. 141-3
7) D. H.Lawrence; *The Lost Girl*, (London, Heinemann, 1920) p. 141
8) ibid., p. 149
9) *The Collected Letters of D. H. Lewrence*, p. 150, 1912年10月6日付け A. W. McLeod あて
10) ibid., p. 183, 1913年2月1日付け E. Garnett あて
11) ibid., p. 193, ロレンス自身，この作品が自分の他の作品に比べて十分視覚化 (visualize) されていないと述べている。
12) ibid., p. 296, 1914年12月5日付け J.B. Pinker あて
13) E. McDonald ed.; *Phoenix: The Posthumous Papers of D.H. Lawrence*, "Education of the People", (New York, Viking, 1936) pp. 587-595
14) D.H. Lawrence; *Fantasia of the Unconscious & Psychoanalysis and the Unconscious*, (London, Heinemann, 1961) p. 10
15) S. フロイト「無意識について」，『フロイト著作集6』(井村・小此木他訳，人文書院) p. 87
16) 上に同じ pp. 101-2
17) D. H. Lawrence; *Fantasia of the Unconscious & Psychoanalysis and the Unconscious*, p. 11
18) S. フロイト「無意識について」p. 92, p. 98
19) D.H. Lawrence; *Fantantasia of the Unconscious & Psychoanalysis and the Unconscious*, p. 103
20) ibid., p. 103
21) ibid., p. 200
22) ibid., p. 13
23) D.H. Lawrence; *Women in Love*,(London, Heinemann, 1921) p. 164
24) S. フロイト「文化への不満」，『フロイト著作集3』(高橋義孝他訳，人文書院) p. 477
25) D.H. Lawrence; *The Lost Girl*, p. 324
26) ibid., p. 325
27) ibid., p. 325